

『ドリアン・グレイの肖像』の一考察

西垣千明
(玉川大学教授)

ペイターの『ルネッサンス』を経て『ドリアン・グレイの肖像』を考察すると、ペイターの審美論が変容して、この小説に反響していることがわかる。「オスカー・ワイルドの小説」を発表したペイターは、その中でこの小説を称えたが、その「道徳性」については厳しいものがあった。『享楽主義者メリアス』を書いたペイターがヘドニストとしての道を歩もうとするドリアンについて「真のエピキュリアン」の何であるかを説いている。しかしワイルドがオックスフォード時代と80年代に受けた影響の多くを吸収して自分のものとして著したものが『ドリアン・グレイの肖像』であった。いかに自分のものとは言えペイターの思想的残響を見ると、興味ある相似的思考の中の相違が浮き彫りにされる。

「オスカー・ワイルドの小説」でペイターはドリアンを自殺的エピキュリアンと評し「人生の多くの物を失い、人間の全有機的調和の発達がない」と説く。確かにヘンリー卿の知的逆説によるドリアンへの説得は、主人公が実践的生活に応用するには難しいことを物語っている。逆説論と行動との不調和の危険性が一種のデカダンスを生みだしているが「デカダンス」の言葉そのものにアンビヴァレンスがあるように、頂点を過ぎた文化を描くワイルドがアンビヴァレンスに近代意識を感じていたのかも知れない。

『ルネッサンス』の「結論」の中では、その「経験」論が有名だが、「人生の成功」には「経験そのものが目的となるべきこと」が必要だとある。一方『ドリアン・グレイの肖像』で「新ヘドニズムを勝ちとる為に経験それ自体を必要とする」と言うヘンリー卿の言葉によりドリアンは本性と違った生き方をする。『享楽主義者メリアス』の主人公が自ら啓蒙されるべき道を探し求めていたのとは異なる。ペイターの「経験 (experience) を犠牲にする」は『ドリアン・グレイの肖像』では「感覚 (senses) を麻痺させる」になっている。この事は抽象的言語からフィジカルで具象的な言語に変化し、情緒的速効性の表現へと移行する。「体験」を得るためには「理論」や「体系」に耳を貸すと言うペイターの言葉は肯定的人生の上で理性に働きかけるが、「体験」の為には「感覚を麻痺させる禁欲主義」や「俗悪放蕩」に拘るなどと言うドリアンの回想は否定的で改革的人生の上でエモーションに作用している。

「ジョルジョーネ派」で絵画の特性は「感覚を喜ばし、作者の意向の内にある絵画的特性の他に一切の詩や科学」を伝えるべきことが主張されているが、『ドリアン・グレイ

イの肖像』の序文および第9章では「芸術は芸術家を隠すものだ」と言う。前者は「内」から「外」へと「他者志向」(Anders-streben)に向う芸術を、後者は「外」から「内」へ向う芸術をとらえているように思える。

「美」と「天才」に関し「ヴィンケルマン」では「美は天才や高い地位と同じ非凡のあらわれ」であるとしてギリシアの歴史からその証明をする。『ドリアン・グレイの肖像』の第2章ではヘンリー卿は「美」を「天才」の型であるとし、「美しいものに説明の要はない」と言うラスキンの「美の観念」との一致がみられる。「ヴィンケルマン」では「美」に対し精神的生命を維持し得る神との共存関係を証明しているが、ドリアンに対するヘンリーの言葉はその裏がえして「神が与えた美を神がすぐ取りあげる」と言う「美」に対する神との対立関係を示している。ヘラクレスやプラトンの‘dry beauty’を信奉するペイターは「美の観念が道徳的知覚の目的物」であることに忠実であったが『ドリアン・グレイの肖像』ではワイルドは「美の観念が智覚的知覚の目的物」として捕らえる傾向がうかがえる。ヴィンケルマンは宗教等の道徳的本能が芸術的本能に吸収されているため、彼の宗教へのこだわりが芸術心を阻害したと述懐した。そしてヘレニズムに近づきプラトンに近親感を抱いた。ワイルドもヘンリー卿の口を通して人間を支配している「宗教の秘密から脱しギリシア的理想に戻る」ことを提案する。彼はギリシア的理想より高いものを求めるが、それがなにか解決されず、逆説的手段が一つの浄化作用として求められる。ペイターはヴィンケルマンがギリシア彫刻に見出した曲線の移り変わりは、静かな海に例えられ見れば動いているが静止の姿がある、とするパルメニデス式主張に結びついていくことにギリシア的理想を求める解決法を見つける。ワイルドは「社会を恐れる心」は道徳に毒された心と考えて罪を犯すことに純化を求めるエレアのゼノンの説に遊んでいるかのようだ。『ルネッサンス』の思想として『ドリアン・グレイの肖像』の中にある残像は、ゼノンの考えがパルメニデスに役立ったあの流れとは逆の方向で推移していたように考察される。